

今後の調査で確認されることもあろうが、まず、遺跡が地下深く埋まっている可能性を指摘しておきたい。

たとえば、円山川が形成した広大な流域には、いわゆる自然堤防や後背湿地が発達し、人々の様々な生活があったにちがいない。大磯地区の円山川川床で採集された縄文土器や塩津地区出土の弥生時代の石剣は、そうした状況の一端を示す遺物である。現状では、図11のような遺物出土地や散布地を指摘し、今後の発見を期待しておくにとどめたい。

また、今後の文化財保護行政の進展のなかで、江戸時代の豊岡藩庁・武家屋敷・商家・道路・寺などの新しい遺跡も、発掘調査の日程にのぼってくる可能性があることを付言して本章の筆をおきたい。

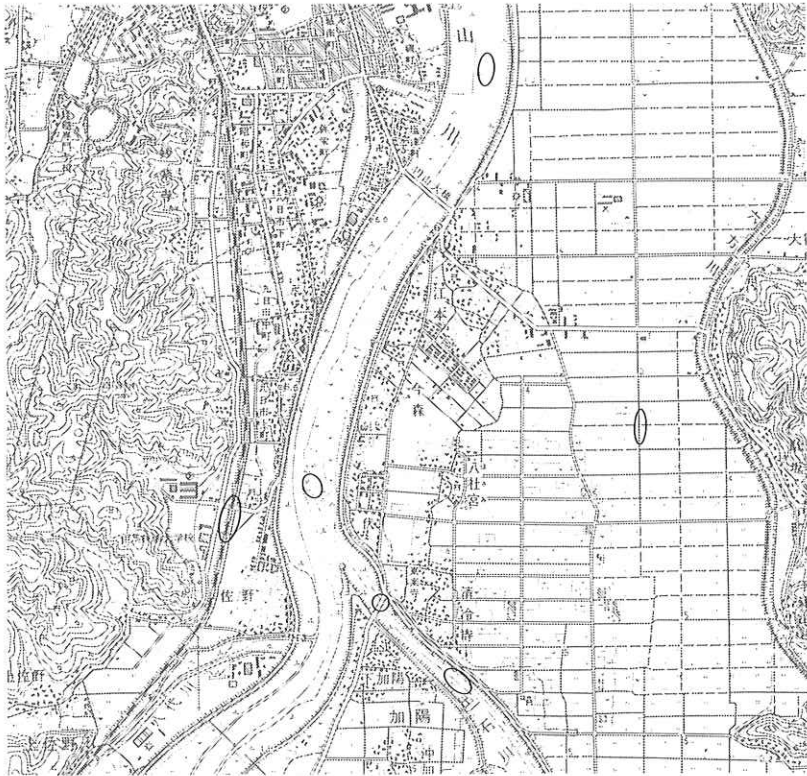


図11 盆地部の遺物出土地

第2章 旧石器・縄文時代の遺跡と遺物

2.1 あらまし

豊岡市には、最近までは縄文時代より以前の旧石器時代の遺跡ならびに遺物の存在は知られていなかった。平成3年になって、はじめて神美地域の古墳調査に伴って旧石器の検出があった。

市内の遺跡で、縄文時代の遺物が出土しているのは奈佐地域が多く、ほかに神美地域・中筋地域・新田地域、さらには盆地中央部を流れる円山川の流れのなかなどで散発的な遺物の発見があった。

特徴的な状況として指摘できるのは、貝塚の存在である。確実なのは新田地域の中谷貝塚と神美地域の長谷貝塚の2か所であるが、ほかにも貝殻の出土や貝殻と土器の出土が伝えられているものがいくつかある。これは、豊岡盆地にかつて海水の入り込んでいたという想定とよく符合する事象であり、県下の他地域に比較しても濃密な貝塚の存在を予測させる事実である。

後にも述べるが、中谷貝塚とその周辺部の調査は、かねてより指摘されていた盆地のこうした状況を一部裏付けた画期的なものであった。これに対して、奈佐谷最奥部に位置する辻縄文遺跡は、その出土遺物から当時のムラの生活、とりわけ宗教的・精神的部分を探るうえで貴重な石棒が出土して注目される。縄文時代後期の代表的な遺跡であり、今後の全面的な調査でムラの構造が解明できるものと期待される。平成2年度に、範囲等の確認調査が実施されている。

円山川川床からまれにはあるが縄文土器が発見されることがある。市域中心部の大磯浜で2点、下加陽地区で数点採集されたのがそれである。その残存状況の良さから考えて、さほど上流から流れてきたものとも考えにくい。盆地中心部の低湿地帯や当時の河川の自然堤防上に立地した遺跡が発見される可能性も強い。それらは、おそらく地下数mのところまで静かに調査の日を待っているものと思われる。

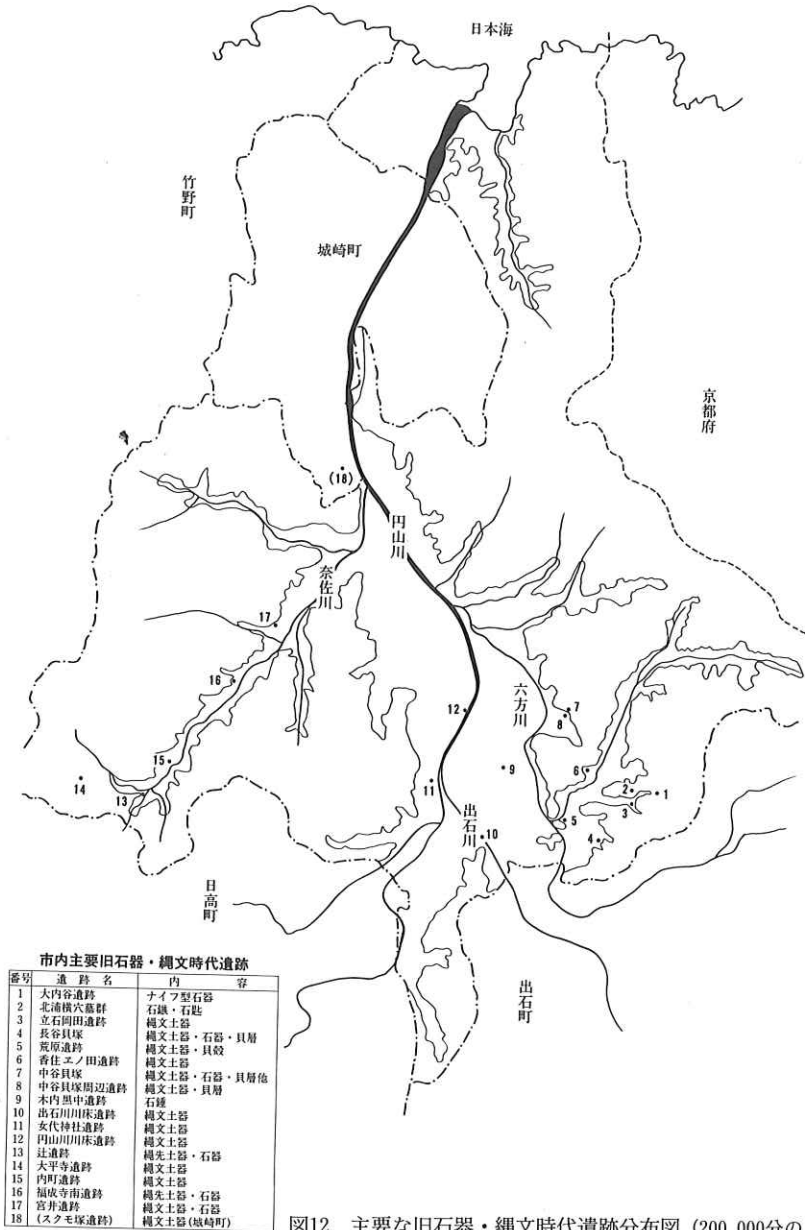


図12 主要な旧石器・縄文時代遺跡分布図 (200,000分の1)

2.2 大内谷遺跡 森尾字大内谷



図13 大内谷遺跡位置図

契機 豊岡中核工業団地造成工事に伴って、平成2年度事業として実施していた大内谷古墳群調査のうち、6世紀後半頃に築造された2号墳の石室の裏込土内からナイフ形石器が見つかったものである。製品1点の単独出土なので、厳密な意味では遺跡と呼ばない方がよいかもしれない。

しかし、豊岡市では初の旧石器発見であり、また但馬地方でも「国府

型」のナイフ形石器ということで価値の高い遺物である。したがって、ここでは遺物について詳細に説明を加える。

遺物は、石室の調査中に作業員の手で発見された。石室基底部の石材を据え付けるための穴（掘形）内から見つかったものである。付近の土中にあったものが石室構築の折にたまたま紛れ込んだものであろう。

立地 遺跡は、西に開ける谷の奥部に位置しており、付近には横穴式石室を埋葬施設とする古墳がすくなくとも5基以上営まれていた。かつては、谷に向かって下降する丘陵が、現在より険しい地形で存在したと思われる。

遺物 ナイフ形石器は、一方の先端が欠けた細長い菱形で、長さ6.3cm、最大の幅2.0cm、厚さは最大で0.9cmを測る。断面は、片側が鋭く、反対側は厚みをもった背を作っている。横方向からみると全体が翼状に湾曲し、いわゆる「翼状剝片」の形状を呈している。基部には打ち欠きが丁寧に施されていて、この部分を木の柄などにはめこみ、実際には投げヤリのように使用したのであろう。

色合いは、やや白みを帯びた灰色を呈しているがこれは風化によるもので、本来は新しい傷口にみられるように黒みがあり、しかもきわめて緻密な材質である。すなわち、奈良県の二上山一帯から産出する良質のサヌカイト（安山岩の一種）に相違ない。

今回発見の旧石器は、いわゆる「瀬戸内技法」によって製作された「国府型」ナイフ形石器で、サヌカイトを主要な材料とした近畿西部・瀬戸内地方の特徴的な石器製作技法によって作られている。石器の形状や製作技法からみて、後期旧石器時代の産物で、およそ2万年前という年代が推定される。

まとめ「国府型」ナイフ形石器は、瀬戸内沿岸を中心に分布するが、広い範囲に影響を及ぼしたとされる。しかし北陸から山陰にかけての地域は、今までこの種の遺物の空白地帯だった。したがって、今回の発見は、この空白の一部を埋めるきわめて重要な資料であり、石材や製作技法もほぼ典型的な例ということになる。おそらく瀬戸内沿岸で製作されたものが当地にもたらされたのであろう。

豊岡市では、もちろんはじめての確実な旧石器時代遺物ということになり、市内最古の考古遺物であった辻遺跡や香住井走遺跡から出ている縄文時代早期の土器よりも、いっきよに1万2、3千年以上古い資料の出現となった。

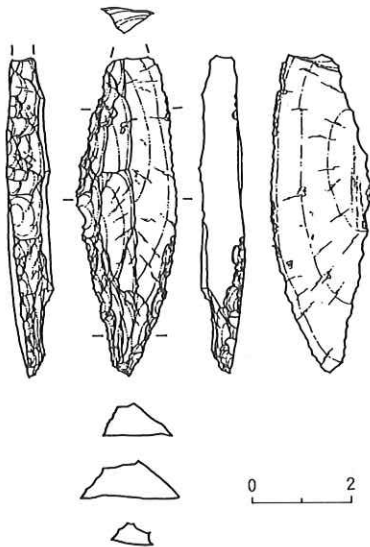
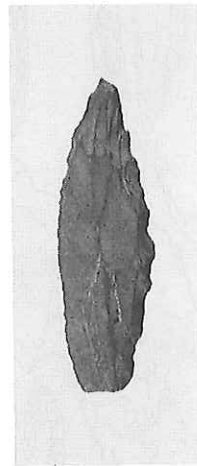


図14 大内谷遺跡出土ナイフ形石器実測図
(大下明・作図)



写1 大内谷遺跡出土
ナイフ形石器

但馬地方でも、旧石器時代の確実な遺物や調査例は少なく、わずかに温泉町の畑ヶ平遺跡などでややさかのぼる時代の石器群が調査されているが、「国府型」ナイフ形石器は、県下でも典型的なものは少ない。

出土状態は、6世紀後半の石室調査中にたまたま見つかったものだが、確実に出土場所がおさえられる貴重な資料である。今のところ確実なものはこれ1点のみで、あるいは狩猟中に偶然放棄された製品かもしれない。

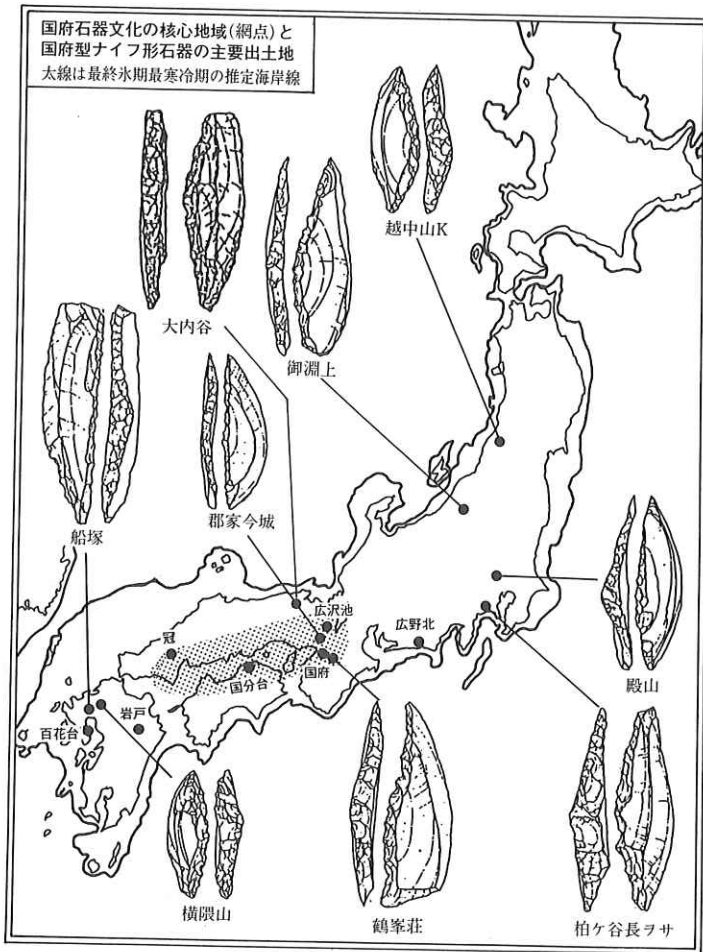


図15 国府型ナイフ型石器の主要出土地

2.3 辻遺跡 辻字前田・下畑・六地藏

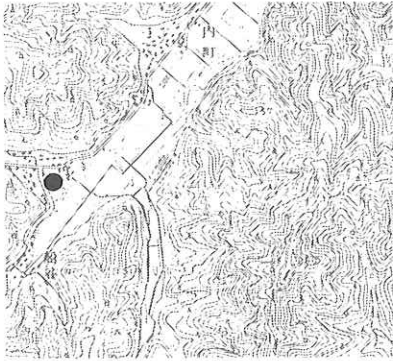


図16 辻遺跡位置図

契機 辻遺跡の調査は、かつて昭和30年代後半になされた県下の埋蔵文化財分布調査に伴って、簡単な試掘と遺物の広がり の地表面観察がおこなわれ、記録が残されている。また、昭和56年に、県道福田－辻線の改良工事が実施されるのに先だって、拡幅部分のみの簡単なトレンチ調査がなされている。位置は、遺跡の本体からはやや西に離れた周縁部分にあ

たる。その後、豊岡市教育委員会では平成2年度および3年度にわたる国庫補助事業として、遺跡の範囲確認と遺構・遺物の実態把握を目的に発掘調査を実施している。その結果、ほぼ遺跡本体の範囲が判明するとともに、多量の土器片をはじめとした遺物の出土・住居址の検出などの成果があった。その結果を中心に記そう。

立地 遺跡は、奈佐川の開析作用によってできた奈佐谷最奥部の、標高40m前後のなだらかな傾斜地形に立地する。西の山裾を通る県道と、東側で合流する奈佐川と船谷川とによって画された三角形の範囲が調査対象である。遺跡本体はこの中央部付近で、一部に作業場や物置などがみられるものの、大半は畑や田で遺跡の残存状態は比較的良好である。

地表面の遺物分布によって推定されていた遺跡の中心部は、生産団地ハウスの東側の畑地で、もっとも濃密な遺物散布の状態が知られていた。平成2年度の確認発掘調査でも、過去の分布調査の観察がほぼ正確に遺跡本体の範囲を捉えていたことが裏付けられている。すなわち、グリッドやトレンチなどによる試掘を計27地点で実施したところ、遺物も多く遺構の遺存している範囲と、その周縁部にあたるためこれらが皆無の地点が比較的明確に識別できた。

すなわち、遺跡本体の広がり は南北約60m、東西約80mと考えられ、

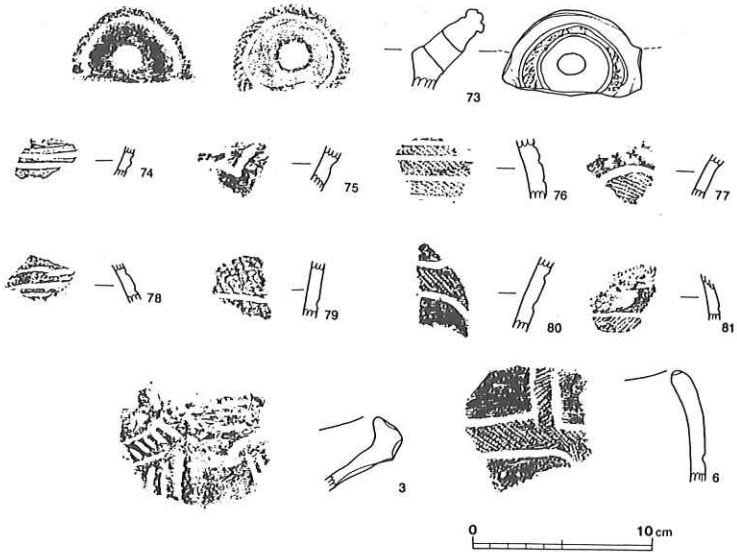


図17 辻遺跡縄文土器実測図

一応この範囲を当時の直接の居住範囲とみなすことができるが、この周りには共同作業の広場、祭の場所など、村を構成するさまざまな機能を有する空間があったとみると、さらに遺跡の範囲は大きく捉えておく必要がある。

遺構 昭和56年の県教育委員会による確認調査では、遺跡の周縁部分であったためか遺構の検出はなかった。今回の調査では、調査面積が限られていることもあり全貌は明らかにしえなかったが、住居址の一部が3か所で確認されている。

後世の削平を受けていて遺存の状態はかなり不良であったが、試掘地点番号の20・24・26などで確認された。いずれも中期末から後期初頭ころの住居とみられる。これらは周囲よりもややレベルの高まった場所で、西方山側からのびてくる地形の高まりに住居がのっていたことが推定でき、東に長い舌状の微高地があったものと考えられる。

遺構は、20で推定径約4mの円形竪穴式住居の一部が検出され、内部か

ら柱穴や土壌とともに、床面を掘りこんで据えた深鉢（いわゆる埋め甕）がみつがっている。24では、4 m×2～2.5 m 程度の不整形な住居址状遺構が多くの土器・石器・集石とともに検出された。また、26でも柱穴や土壌の集中している状況が確認されている。これらの遺構は黄褐色の砂礫質層を掘りこんでおり、礫を多く含み地盤としてはやや不安定とも思えるこの層が集落立地のベースとなっている。

なお、遺構の集中する範囲のとくに北側では、土器を主体に遺物が大量に検出されており、10・13の地点では黒色土の遺物包含層の厚みが30 cm ほどみられた。これらの遺物は中期末から後期前葉にわたる時期のものだが、層的には混在しており、新旧の土器を層ごとに捉えることはできなかった。

遺物 遺物は、比較的まとまった量の採集資料があるほか、今回の調査でも多数の土器片ならびに石器が出土している。古いものでは、本編にもふれたように、市域最古の土器として縄文時代早期に位置づけられる山形の押型文土器がある。小さい破片であり、また採集資料という難点はあるものの、貴重な遺物である。

またこれにつづき、採集資料と今回出土分の中には早期末頃に考えられている表裏縄文土器片がある。量的には少ないが、辻遺跡の本格的な開始に先立つ生活の痕跡として注目されよう。

遺跡の主体となる時期は中期の末から後期の前葉頃である。この時期に遺跡の拡大や人口の増加があったものであろう。土器は、縄文・沈線文・刺突文などもちいた有文土器片が多く、意匠をこらした口縁部の装飾部分も出土している。磨消縄文で知られる中津式に属するものが多く、この前後の時期の北白川C式並行期や福田K II式がみられる。いまのところ確実な前期や、後期後半から晩期の遺物は知られていない。

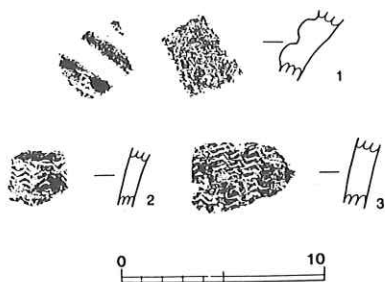
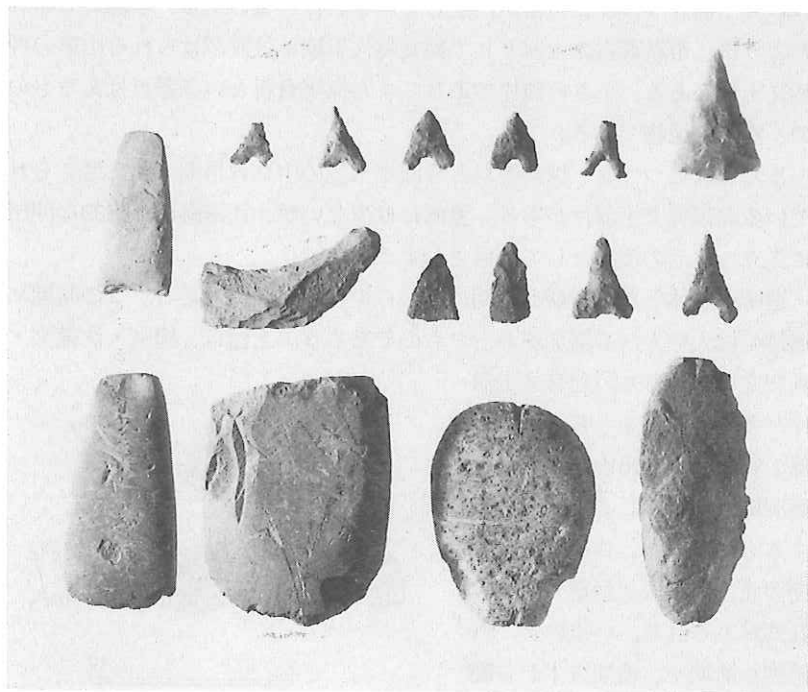


図18 辻遺跡早期の土器片実測図

一方、石器も多く、種類もバラエティーに富んでおり、石鏃・石鏃未製品・槍先形尖頭器・石錐・楔形石器・削器・磨製石斧・磨製石斧未製品・打製石斧・敲石・磨石・石皿・切目石錘・礫石錘・石棒・石柱・石製装飾品などが判明している。

注意をひくのは、石器類のうち未製品が認められることや、製作のための材料と考えられる泥岩・泥板岩などの剥片や石核が出土していて、当地で石器製作がなされたことはほぼ間違いないようである。

このことと関連するが、遺跡の東方に南に入り込む谷があるが、ここには古墳時代の管玉等の材料である緑色溶結凝灰岩が採集できる場所がある。辻遺跡出土の石鏃には、同石材で作ったものが1点みつかっており、石材の小破片も多数採集されている。ほかにメノウ・水晶・鉄石英といった石材片も散布していることから、石鏃製作だけでなく、装身具の製作と関連



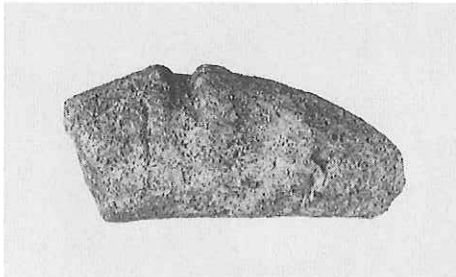
写2 辻遺跡の石器

するものであれば興味深い。

先の県の調査報告のなかで、採集資料石器の比率分析から狩猟用石器の率が著しく高いことが指摘された。一般にトチやドングリなどの堅果類主体の植物性食料が中心の生活であったらうとはされるものの、やや動物性食料の占める部分が大きいのではないかとの見解も示されている。調査資料では、磨石や叩き石などに比べ、漁業用とみられる石錘の比率が多いことも注目された。

また、石器類のうち、石棒・切目石錘・石柱・石製装身具などには、東日本の中部高地からの文化の流入を考慮させるものと理解されている。調査では、石棒や石柱あるいは土偶といった祭祀関連の遺物は出土しなかったが、今後、土器を含めた遺物全体の分析の中で東日本との文化的な関わりについても浮かび上がってこよう。

まとめ 土器の示す時期は早期・中期・後期であり、前期と晩期の遺物は知られていない。早期は土器片が少ないことや、ここから近い早期や前期の遺跡として著名な日高町神鍋遺跡などとの関連を考え、キャンプサイト的な性格を指摘する人もある。遺跡は、中期末ごろ本格的に始まり、後期初頭に盛期を迎えているようである。その契機は近畿地方を経た東からの文化の流入とも考えられ、日本海側でのこの時期の様相を知る重要な遺跡である。また、海辺の立地と山間部の立地という点で対照的な中谷貝塚と本遺跡は時期的に重なる部分があり、両者の比較をとおして実態がより明瞭になろう。



写3 辻遺跡出土の独こ状石器



写4 辻遺跡出土の土器



写5 辻遺跡の検出遺構

2.4 中谷貝塚 中谷字殿替

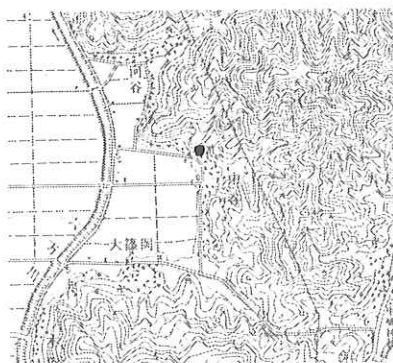


図19 中谷貝塚位置図

契機 中谷貝塚は、大正2年の発見以来、地主である松井家の深い理解と、熱心な保護意識に支えられて今まで保存されてきた。西日本でも代表的な縄文時代後期の貝塚として研究者に知られ、過去数回の試掘がおこなわれている。

今までも、昭和16年の立命館大学（藤岡・岩根ほか）・昭和23年の岡山大学（近藤義郎ほか）・昭和26年の

山根武と豊岡高校歴史研究部などによる調査がなされ一定の成果が上がっているが、豊岡市教育委員会ではさらに積極的に保護・活用を進めるために、範囲や性格を確認することを目的に発掘調査を実施することにしたものである。調査は、昭和61年度の国庫補助事業として実施した。

調査後、遺跡は埋め戻されて兵庫県指定史跡として現状保存がなされ、また貝層の剥ぎ取り標本も3枚が採取され、市立郷土資料館等で公開されている。

ここでは、まず立命館大学の調査成果については、大学が保管している遺物を図で紹介し、主として豊岡市教育委員会が実施した調査の結果についてふれていくことにしたい。

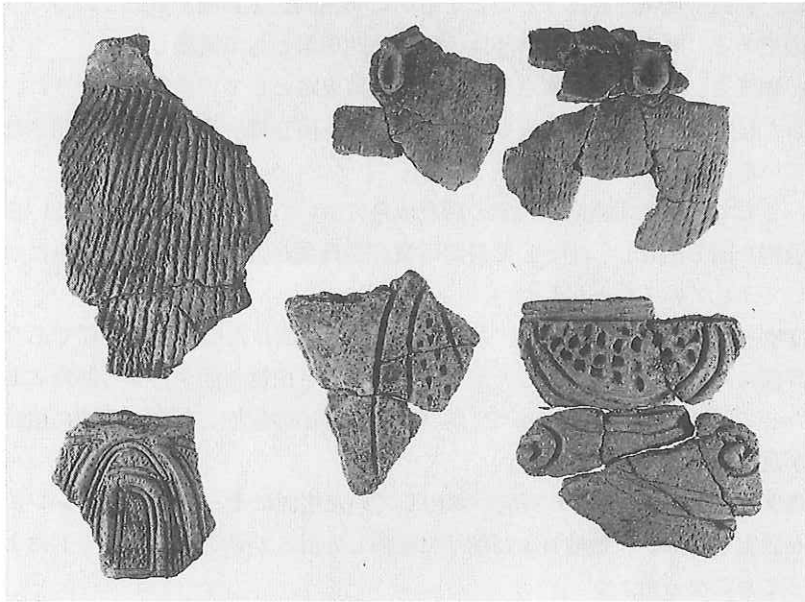
立地 貝塚が立地するのは、大ざっぱには南に面した山裾の斜面部であり、詳細にみると谷川が形成した扇状地的な地形と山裾斜面が接する部分にあたっている。標高約7~8mで、現状では松井家の敷地と背後の畑地に遺跡が重なっている。

遺構 調査は、従来から貝層が露出していた崖面にそって東西にトレンチを設定したほか、敷地および畑地に配置した計5か所のテストピットによっておこなった。

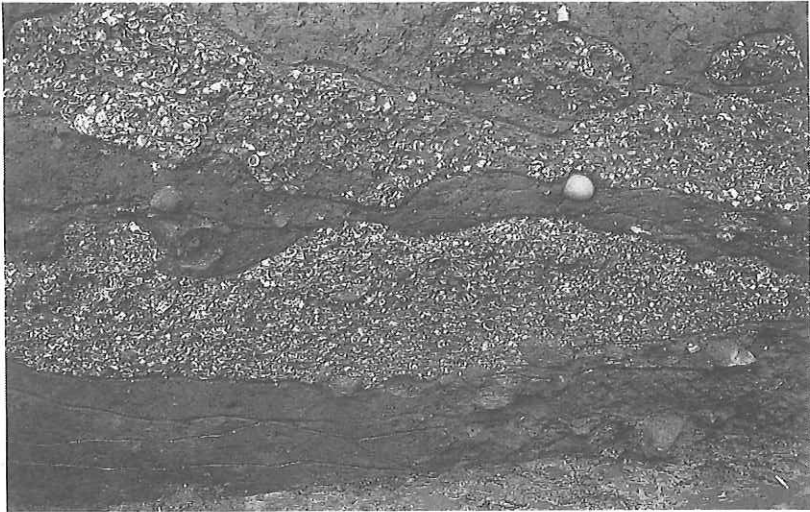
貝塚は、貝層がすなわち遺構である。貝層以外の遺構で縄文時代に属す

るものは確認されていないが、第2、第3地点など貝層範囲の外縁部には遺物の出土状態などから住居跡の存在が想定できる。貝層そのものの範囲は、トレンチ部分で東西12.5m程度は確認できた。南北は明確でないが、山裾側にはあまり延びていないようで、第1地点付近を中心として松井家の母屋にのびている。第5地点の調査では約2.5mの深さでも貝層は確認されず、おそらく母屋の下部で貝層の南端がとどまっているものと考えられる。したがって南北もほぼ13m程度の範囲とみられる。貝層は、厚いところでは85cmの堆積があり、間層をはさんで上下に区分できるなど、形成の時期や様子がわかる良好な状態である。

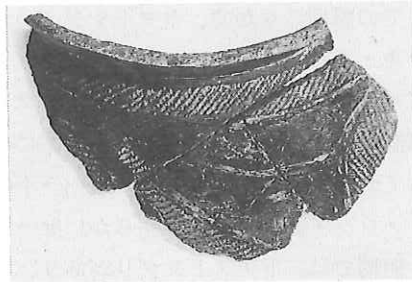
東西断面でみると、貝層は標高6.5~7.5mにかけて形成され、西側は傾斜が強く、東側は比較的なだらかに堆積している。きわめて良好な遺存状態で、大まかには3貝層に区分できる。上部層は部分的に後世の攪乱・削平を受けているが70~80cmの厚みを成しており、貝の形状を良く留めている。中部層は、破碎状態の貝層で比較的薄い堆積である。下部層は幅3



写6 中谷貝塚出土の縄文土器(今回調査分)



写7 検出された中谷貝塚貝層



写8 以前調査の大洞系統の土器片
(立命館大学調査遺物)

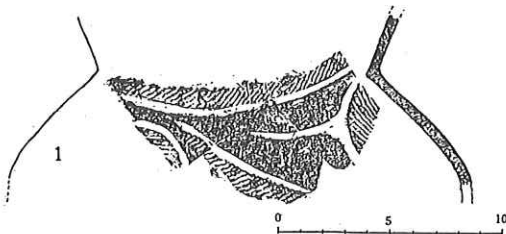


図20 同上実測図

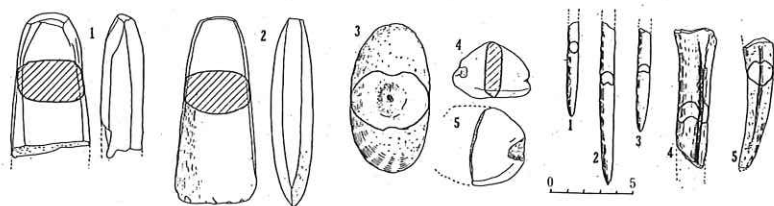


図21 中谷貝塚出土の骨角器など (立命館大学調査分)

m、中心部の厚み 50 cm のブロック状の貝層で、やや破碎状態の貝層である。こうした形成の状態から、時期によって貝層形成のスピードが変化したらしいことがわかる。

貝種はヤマトシジミが圧倒的に主体であり、つづいてマガキ、ハマグリなどが部分的にめだっている。土器や石器あるいは獣骨などの遺物は、貝層と間層との間で検出されるものが多く、貝層内には比較的少なかった。遺物 貝塚出土の遺物には、自然遺物と人工遺物がある。自然遺物として貝類があるが、今までの整理のなかで、ヤマトシジミ・オキシジミ・ハマグリ・アサリ・マガキ・サルボウ・ハイガイ・ナミマガシワ・アカニシ・テングニシ・カワアイ・ツメタガイ・イシガイ・オオタニシ・ウミニナというように15種が確認されているが、量的には圧倒的にヤマトシジミが多い。

魚骨も採集されており、クロダイ (チヌ)・タイ・不明種が、また獣骨や歯牙ではシカ・イノシシ・タヌキなどが明らかになった。鳥骨もあるが種類は不明である。植物では、トチ・ドングリがあり、ほかに木炭?も検出されている。

人工遺物としては、土器と石器が若干ある。まず土器は、縄文中期の船元III式～里木II式の土器が古い一群で、続いて中期末の沈線と刺突を多用する土器群がある。後期中津式・福田KII式など後期初頭のもが目立つが、以降晩期の前半頃まで断続的にみられる。従来、後期の代表的貝塚と理解されてきた面があるが、今回の調査では中期の土器が量的にまともって出土した点が大きな成果であった。

石器類では、磨製石斧・打製石斧・石鏃・削器・石皿・敲石・磨石・石錘などが出土しているが量的には少ない。辻遺跡の石器比率と比較して、

貝塚という遺跡の性格を反映しているのであろうか。さらに骨角器では漁具としてのヤスがあり、鹿の角に加工痕の残るものもみられる。

そのほか新しい時期の遺物も確認されており、弥生時代後期から平安時代頃の生活が営まれていたことも判明している。

まとめ 調査の結果、端部が明確に確認されたものではないが貝層のだいたいの広がり把握され、断面観察によって、間層をはさんだ良好な堆積状態で遺存していることが確認された。西日本でも数少ない貝層の資料となろう。

遺跡は貝塚のみが検出されたわけだが、貝塚を残した人々の生活の場が近接していることは、一般的に指摘されるところである。おそらく、貝塚の東に広がっていく谷部に住居址などの存在が想定できる。山野の恵みを得ながら川海の産物にも舌つづみを打つ古代人の生活が目に見えるようである。

また、当初予測していた後期よりも早く、中期段階から貝塚の形成が始まっていることが確実となり、豊岡盆地の形成過程の研究にとっても貴重な成果を提供したことになる。

今後遺物の詳細な検討が進み、次に述べる自然貝層の種類や時期の分析が進んでいけば、豊岡市の縄文時代中・後期の精神生活・生産活動、さらに加えて自然環境復元にとって重要な手がかりを与えることになる。

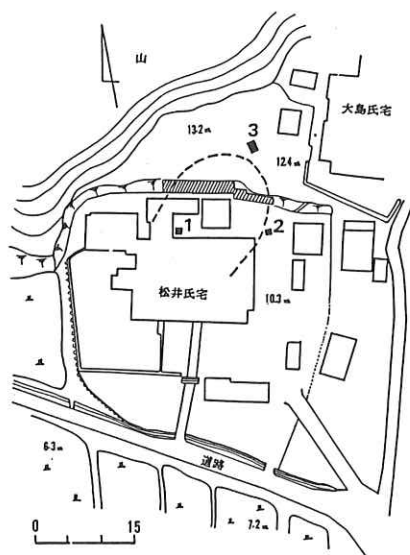


図22 中谷貝塚遺跡範囲想定図

2.5 中谷貝塚周辺遺跡 中谷字猪垣・福天ほか

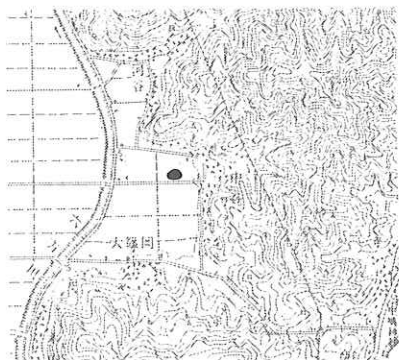


図23 中谷貝塚周辺遺跡位置図

契機 中谷貝塚の調査とは別に、ほ場整備事業に伴う事前の分布調査で若干の遺物が採集されたため、昭和62年9月から10月にかけて貝塚南側一帯の水田部を確認調査した。

そのころ、前田保夫理学博士指導の立命館大学の豊岡盆地研究グループの調査が付近で進められており、たまたまハンドボーリング調査によって水田下に貝層存在の可能性が指

摘された。その結果を受けてテストピットを設定したところ、約2m下部に自然貝層の存在が明らかになったものである。

前年に実施した中谷貝塚の調査では、縄文時代中期から晩期にかけての良好な貝層の遺存をあらためて確認し、ヤマトシジミを主体とした貝種などから、当地の古環境を復元する貴重な手がかりとして重要性がさらに高まっていた。

こうした貝塚の形成舞台となった環境を復元するうえで、さらに周辺部を調査することによって資料を得ておくことが必要と考えられた。また、かつて南東の山沿いに遺物を採集している地点もあり、貝塚関連以外にも確認調査を実施しておきたい地域であった。

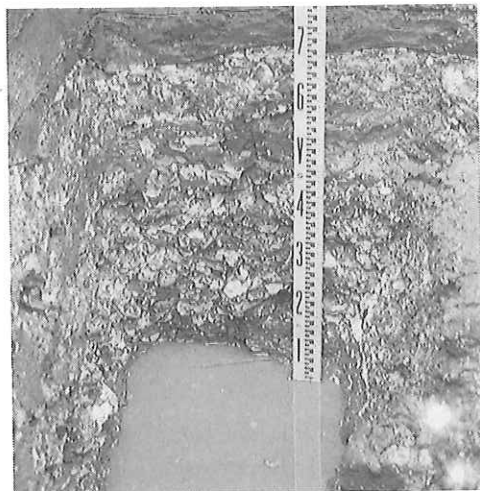
立地 調査地の水田は、円山川の支流である六方川の後背地である。市街地からは南東に約4kmの位置にあり、周辺には前述の中谷貝塚がすぐ目の前にあるほか、弥生後期の半坂墳墓群や大篠岡遺跡などが知られている。また、やや離れて南南東約2.5kmには縄文後期の長谷貝塚、南約2.5kmにも同時期と見られる荒原遺跡(貝塚?)などが知られている。

遺構 貝塚の南側の標高2~3.7m付近にグリッドを設定した。これらの規模は2m×2mを基本として、計8穴を掘り下げた。位置の選定については、基盤整備工事の設計上、水路あるいは道路となる部分を重点に置いて

いる。

厳密な意味では遺構の検出はなかったが、ここでは自然貝層や遺物が検出されたものについて、土層を中心に説明する。

G 1 は、貝塚から約 130 m の位置に設定した。規模は 1.5 m×3 m で、深さは 2 m まで調査した。耕作土以下 1 m の 7 層（暗灰色砂質土）までは須恵器を包含しているが、10 層（白味の強い粘性土）以下に縄文土器片、石鏃が含まれていた。



写9 G 2で検出された自然貝層（中谷貝塚周辺遺跡）

最下層は暗青灰色の砂層となって、この層がかなり厚く堆積していると考えられる。隣接して設定した G 2 では自然貝層の検出があったが、ここから同一レベル（標高で 0.5 m 付近）で出ていない。

G 2 は、G 1 の西に約 8.5 m の間隔をあけて設定した。規模は 2 m×2.5 m で、約 2.5 m 掘り下げた。13 層の白味の強い粘質ピートが、G 1 の 7 層に対応する。19・21 層は貝層で、標高にして 0.55 m 以下に堆積している。

第 1 貝層（19 層）は厚さ約 15 cm、第 2 貝層（21 層）は約 42 cm ある。いずれも貝の種類はマガキがほとんどで、ヤマトシジミがこれに次いでいる。しかし、ヤマトシジミは第 2 貝層下部にはほとんど見られない。貝層の下は暗灰色砂層となり、ボーリングの結果約 4 m の堆積があることが判明している。

第 1 貝層の直上の暗灰色粘質ピート層には、縄文土器片が含まれており、ごく少量は貝層中や第 2 貝層との間層中にも認められた。こうした状態から、当初は貝塚かと思われたものの、個々の貝が「口をあけられた形跡がない」ことから自然死した貝の堆積であることは明白である。なお、G 1 で認められた木材や植物種子などは比較的少量であった。

貝の種類は、神奈川県立博物館の松島義章氏の現地観察によるものであるが、マガキ・アサリ・ハマグリ・イボウミニナ・カワアイ・ヘナタリ・ナミマガシワ・ヒメカノコガイ・シオヤガイ・カワグチツボ・ウネナシトマヤガイ・ムシロガイ・ヤマトシジミなどであった。

G 3 は、貝塚の南西約 80 m に設定した。規模は 2 m×2 m で、深さは約 2.6 m まで調査した。ここでは、G 2 で検出された自然貝層の範囲を追及をする目的があったが、同一レベル以下まで下げたが検出されなかった。縄文土器片・獣骨・獣歯が含まれ、とくに最下層の砂層に土器が多かった。また、トチ・クルミなどの有機物の遺存が良好であった。

G 6 は、貝塚からは約 190 m 南に設定した。標高約 1.9 m の水田で、G 7 とともに低い位置に設定したグリッドである。規模は 2 m×2 m で、深さ 2.4 m まで掘り下げた。その結果、G 2 に次いで自然貝層が検出できた。

そのレベルは貝層上面で標高 0.45 m と、G 2 の貝層とほぼ同レベルであった。貝層の厚みは最大 70 cm を測り、G 2 と異なって間層は挟まず 1 層である。貝種はマガキが圧倒的に多く、ヤマトシジミがこれに混じっている。全体に G 2 よりも貝の形状が良く残り、下部ではとくに遺存状態が良好であった。黄褐色に変色しながらも中身の組織まで保つものが多かった。なお最下層は、暗灰色の粘質シルト層となっている。

縄文土器の出土量は多く、貝層直上の第 8 層（黒灰色でピートが混じる中砂）に多いのは G 2 と同様であるが、貝層中にかなりの量の土器片が含まれていた。ブロックサンプリング時の観察によれば、土器は貝層上面から約 50～60 cm のあたりにとくに多くあった。これらは他のグリッドから出土している土器とほぼ同様の形式で、粗製の深鉢が多い。時期的にはすでに縄文を施さない段階のものである。

G 7 は、貝塚からもっとも離れたグリッドで南に約 260 m の位置である。規模は 2 m×2 m で、深さ約 2.4 m まで調査した。ここでは水田下 1 m 付近まで砂層、礫層が多く、かつて水田の基盤をかさあげたときの入れ土と考えられる。

最下層は暗灰色粘質シルト層でピートを混じている。この層から縄文土器が 1 片出土した。なお最下層は、G 6 の自然貝層直下の層に対応するも

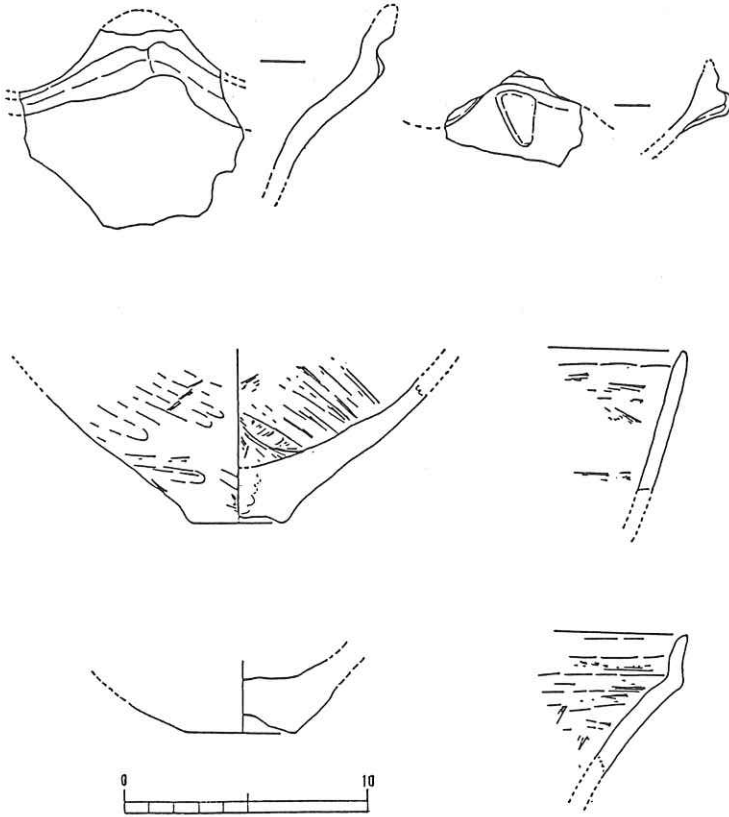


図24 出土土器実測図（中谷貝塚周辺遺跡）

のである。したがってこのグリッドは自然貝層の範囲外にあることが確実である。

自然貝層の存否は、このように地点によって異なっており、かなり複雑な形成の要因があったものであろうか。

遺物 量の多少はあるが、自然遺物ではすでに述べた貝類・獣骨・歯のほか、クルミ・ドングリ・トチなどが検出されている。また、縄文土器が多数と石鏃や石錘が若干みつまっている。

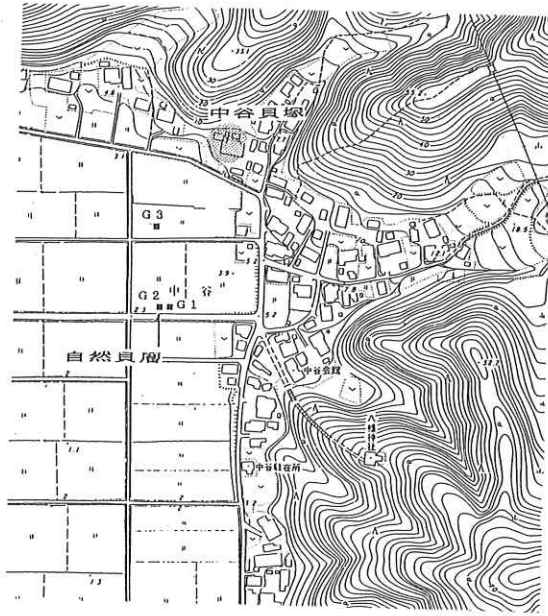


図25 中谷貝塚と自然貝層出土地の関係

まとめ 以上のように、中谷貝塚の周辺水田部の確認調査を実施した結果、遺構の検出はなかったが、自然貝層と縄文土器包含層を検出し、当初の目的であった当地の古環境を知ろうと大きな成果を得ることができた。

自然貝層の高さは、標高にして0.50～0.55 mあたりにある。また、その貝種はマガキを主体としてヤマトシジミがこれについて多い。

したがって、当時の環境としては、内湾の潮の満ち干のある泥質干潟と考えられ、汽水域が次第に離水していく過程を示している。また、珪藻遺骸群集の分析から、海成層の上限標高は0.7 mと判定されている。

出土した縄文土器の時期は、後期後葉ころと考えられる。

有文の土器片が少ないため時期の判定が難しいが、確実な晩期の土器は含んでいないようである。これらが貝層の直上や一部は層中から出土していることから、自然貝層の形成時期も後期後葉を含み、その前後の幅におさまるものと推定できる。名古屋大学水圏科学研究所による炭素年代の測定結果によれば、上記の年代観と矛盾せず、しかも中谷貝塚の形成期間とも重複する年代が測定されている。

今回の調査によって、中谷貝塚から近いところで約150 mほどの場所でマガキ・ヤマトシジミなど貝の採取がなされていたことがほぼ確実となった。貝塚と採取地がセットで把握できる希少なケースとして、この調査の成果はきわめて大きいものがある。

2.6 長谷貝塚 長谷字ヨウガイ

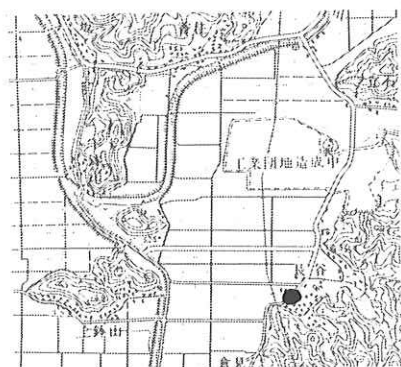


図26 長谷貝塚位置図

契機 長谷貝塚は、昭和34年に同地で防火用水槽の設置のために地下深く掘削して、多数の貝殻とともに若干の縄文土器が出土したことによって遺跡の存在が知られるに至った。

当時、貝塚と指摘した研究者もあったものの、具体的な出土の様子のはっきりとしなかったため、貝塚として十分に周知されるまでにはなら

なかった。

ところが、その後に県道出石永留線の拡幅工事があり、それに伴って兵庫県教育委員会の手で確認調査が実施された。貴重な成果があったので、報告書によって簡単にふれておこう。

立地 遺跡が立地するのは、長谷地区の集落が立地する谷が北西方向に扇状地形に開けていく谷頭部にあたっている。確認調査によると、貝塚が形

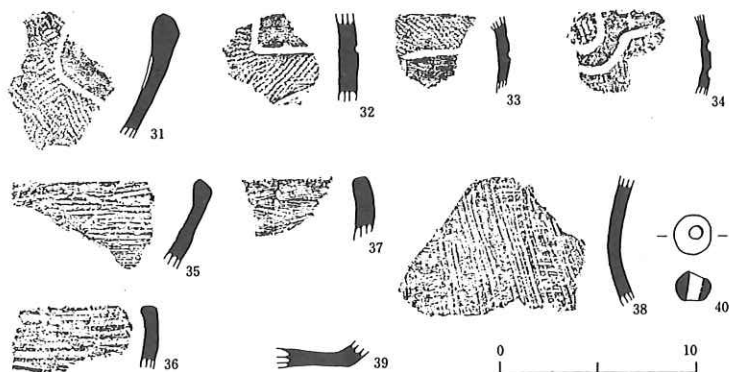
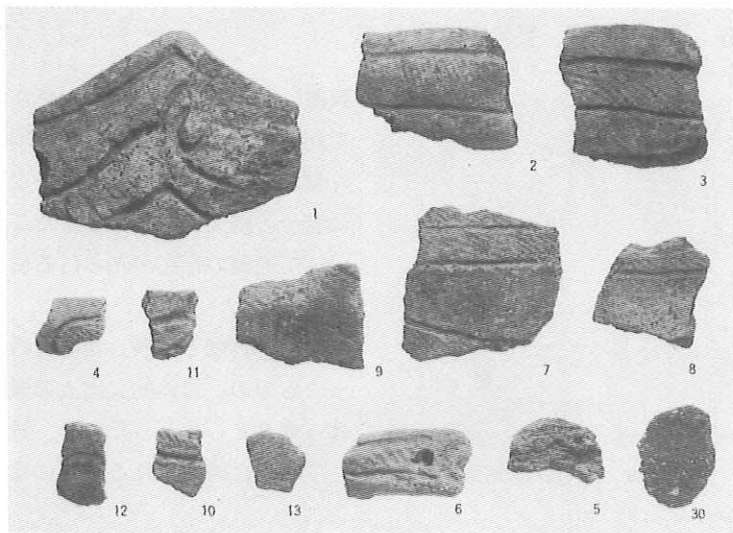
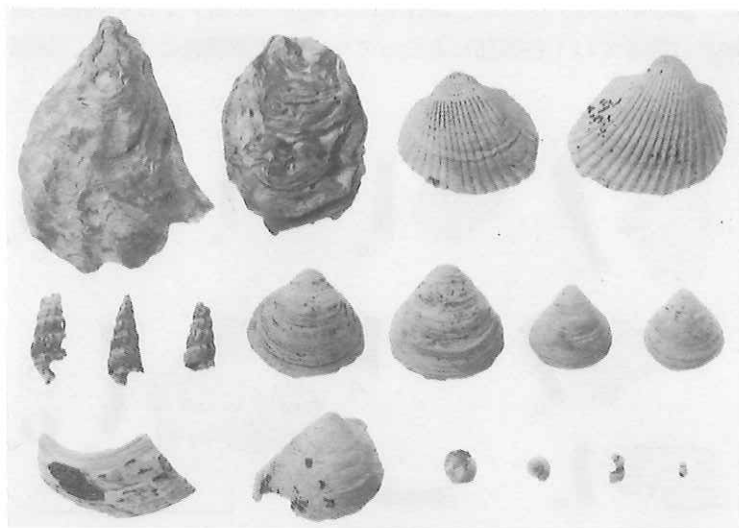


図27 長谷貝塚縄文土器実測図 (既発見分)



写10 長谷貝塚出土の縄文土器 (今回県調査分)



写11 長谷貝塚出土の貝類 (今回県調査分)

成された地形は、県道付近で急激に下降していき、おそらく当時の湿地へと続いていくものとみられる。古環境の復元的検討によると、あまり遠くないところにまで海進があったことが想定されている。

遺構 グリッドを設定しておこなわれたものと、重機による掘削後に断面観察を実施したものがある。天候や工事の進捗状況等の関係で不十分なものとなったが、貝層が確認され、貝塚であることがあらためて確認された。貝層が確認されたのみで、他の遺構は見つかっていない。

遺物 遺物は、今回の確認調査で出土したもの、郷土資料館保管の石田松蔵氏旧蔵の資料がある。

まず自然遺物としては、採取された約11kgのサンプリング貝類のうち78%以上がヤマトシジミで、次いでサルボウ13%、マガキ8%で、そのほかハマグリやイボウミニナが若干認められた。魚ではタイもしくはタイ類・フグなどが、獣ではニホンジカ・イノシシ・イヌもしくはタヌキの骨や歯牙が検出されている。はちゅう類ではヘビが見つまっている。

土器については、いずれも縄文時代後期中津Ⅱ式に分類されるもので有文のものでは沈線を多用するものや、貝殻による条痕文も認められる。また1点ではあるが土玉が以前の出土の際に採集されている。

石器類では、タタキ石・石錘・磨製石斧・石鏃が検出されている。

まとめ 当遺跡は、立地が中谷貝塚と若干異なるが、地形観察の結果からは前面の環境として中谷貝塚や中谷貝塚周辺遺跡の項で述べたのと同様の干潟状地形が復元されている。また、調査による限りでは貝層の見える範囲は大きなものではないが、地元の人々の情報を総合すると谷の奥側に広がりが続くか、別の貝塚が存在する可能性が指摘されている。

先述した中谷貝塚とともに、山裾に立地する縄文遺跡のひとつで、前面には干潟状の湿地が展開しており、豊富な魚類や貝類の捕獲が可能だったのであろう。こうした地形は単に神美地域や新田地域のみならず、市内には他にも存在しており、今後の新発見が大いに期待されるところである。

2.7 宮井遺跡 宮井字谷殿ほか

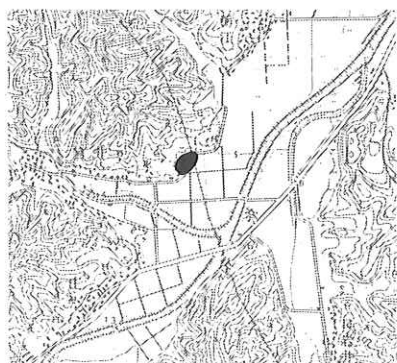


図28 宮井遺跡位置図

契機 宮井遺跡の調査は、宮井土地改良区のほか整備事業に伴い昭和51年度事業として実施した。調査は、条里関係の探索のためと、遺跡の範囲確認を目的とした確認調査で、事前の分布調査で遺構存在の可能性が高い山裾付近などにトレンチを設定した。

以下、出土遺物のうち、縄文時代に属すると考えられる石器や土器片について略述する。

立地 宮井地区の標高110mあまりの山頂から、東に向けて下降した地形が山裾で緩やかな傾斜に変化し、やがて低湿地の田へと移行する。縄文時代の遺物は、多くが工事中の田面から採集された。

遺構 トレンチ調査により、遺構の有無、土層の確認等を実施した。

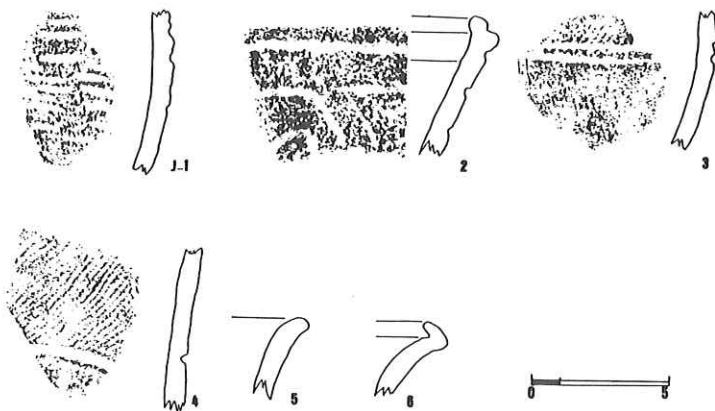
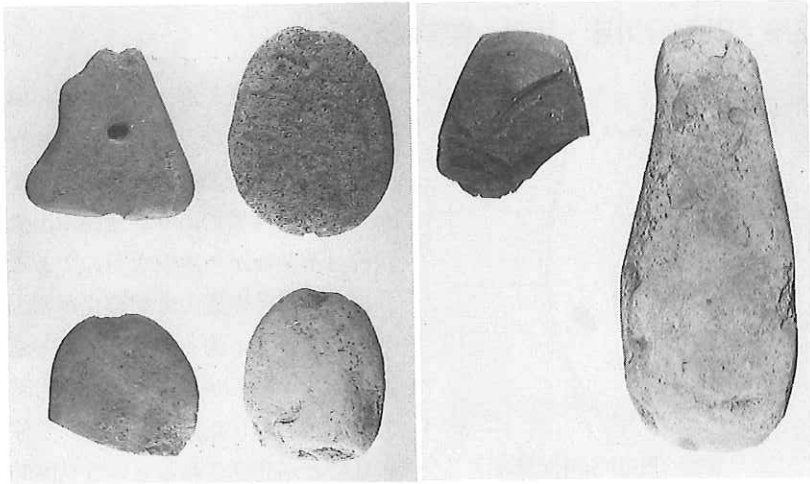


図29 宮井遺跡縄文土器実測図



写12 宮井遺跡の石器

縄文時代に属する遺構は、調査範囲が狭いこともあり調査によるかぎりでは明らかにはできなかつた。わずかに、縄文土器や石器はトレンチの第4層のみで出土することが確認されている。

遺物 この時期の遺物には、土器と石器がある。土器片は調査後の工事による出土遺物を含めても、全部で10数点で多くない。いずれも縄文時代後期のものである。石器は、打製と磨製の石斧・石錘・凹石などがあるが、石器の時期と同様に後期のものであろう。

まとめ 本遺跡は、河岸段丘上に立地する遺跡で、遺物の出土状態からは、縄文時代の遺跡の本体は山側のやや高い部分に立地するものと理解される。現状では、奈佐谷最奥部の辻遺跡と同様の時期の遺跡であるが、立地はかなり異なっている。遺物の量がすくないため、詳細な検討は不可能なものの、辻遺跡とは性格的に異質なものではないかと考えている。立地からは、むしろ先の中谷貝塚や長谷貝塚に近く、山野と川海の幸を主たる生産物としながら、当然付近に貝塚を形成するような生活が復元できよう。

なお、この時期に遺跡の数が増加するのは一般的な傾向のようで、未確認ながら同様の地形を呈するところでは、地下深く縄文遺跡が埋まっていることであろう。

2.8 円山川川床 大磯・塩津付近



図30 円山川川床位置図

契機 昭和51年8月、大磯地区に属する円山川の川床から魚釣り中の児童が発見したものである。川のなかからの土器採集であり、遺跡や出土状況は不明ながら重要なものである。

近年の遺跡発掘の大規模化が要因となって、地下深く埋まっている遺跡の存在が明らかになり、また当時の河川が形成した自然堤防上から住

居址などが発見されるという全国的な傾向がある。こうしたものの一例かと考えられるが、その後の発見を加えて縄文土器は2点採集されている。

立地 遺物が採集されたのは、市街地の 大磯・塩津両地区にかかる円山川の川中および堆積した砂州のなかである。現在では地形が変貌しているが、発見当時は大量の砂と砂利が寄って砂浜を形成しており、弥生時代以降の

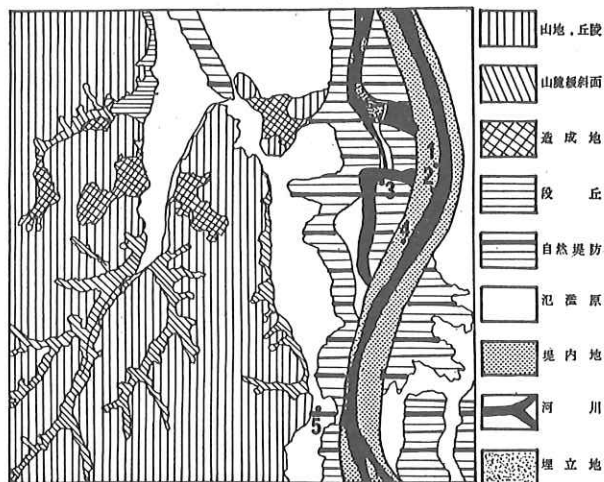
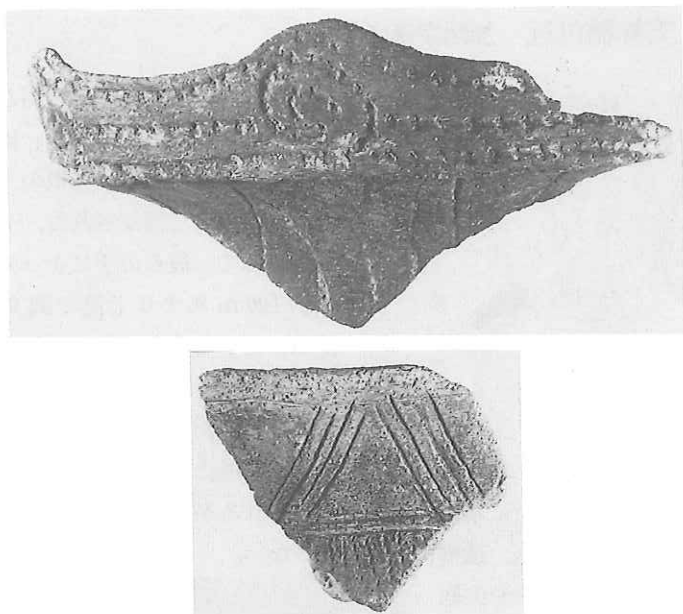


図31 円山川川床付近の地形分類



写13 大磯浜採集の縄文土器

遺物が散布していた場所であった。

付近は、旧円山川が東側に大きく蛇行したその頂部の左岸にあたる位置である。したがって、円山川が形成した自然堤防が付近にあって、本来の遺跡も近い場所にあるのではないかと想定される。

調査は実施しておらず、採集作業のみで遺構も当然検出できていない。
遺物 一方は頸部が大きくくびれる深鉢で、口縁部から胴部にかけて文様がみられる。口縁の文様は太い沈線のなかに円形の刺突を施すもので、後期の津雲式と推定される土器である。

他方は、広口壺状を呈するものであるが、やはり深鉢形土器と考えられる。連続に山形文を口縁部に配置する例で、これらの線が2本を単位としているところから、竹管を半分にしたもので施文したと考えられる。

まとめ これらの遺物は、川のなかからの採集とはいうものの、さほどローリングによる破片断面の磨耗が進んでいないことから、本来の遺跡がそう遠くない位置にあることを予測させる。

2.9 天神橋付近 加陽字森ノ前

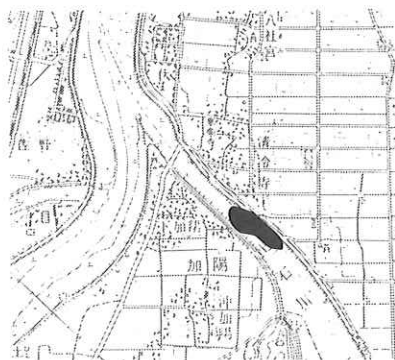


図32 天神橋付近位置図

契機 円山川と支流の出石川が、天神橋付近で合流しているが、橋の付け替え工事に関係して多数の土器片が児童によって採集された。それを契機として、彼らの手によって、橋の約100 mあまり上流で縄文時代前期に属する完形の鉢が採集された。

立地 出石川に堆積した砂のなかから採集されたものである。両河川の合流地付近には自然堤防が発達して

おり、沖加陽地区付近に本来の遺跡が求められるかもしれない。

採集作業のみを実施。遺構は検出していない。

遺物 縄文土器は、やや尖底の完形の鉢形土器で、口縁部径11.7 cm、高さ8.5 cmあまりを測る。前期の遺物である。

まとめ 基本的な性格は、既述の大磯で採集されているものと同じであろうが、時期的に前期に属する可能性があり、古いことが注目される。沖加陽地区の山裾には弥生時代の加陽遺跡があり、そうした遺跡の立地との関連も注意しておきたい。



写14 出石川川床採集の縄文土器

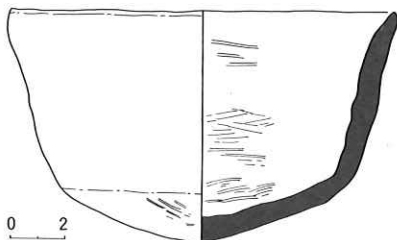


図33 同上実測図

2.10 福成寺南遺跡 福成寺字熊中

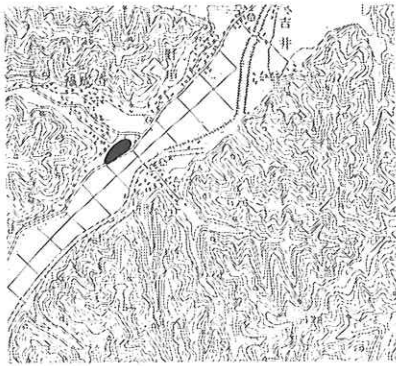
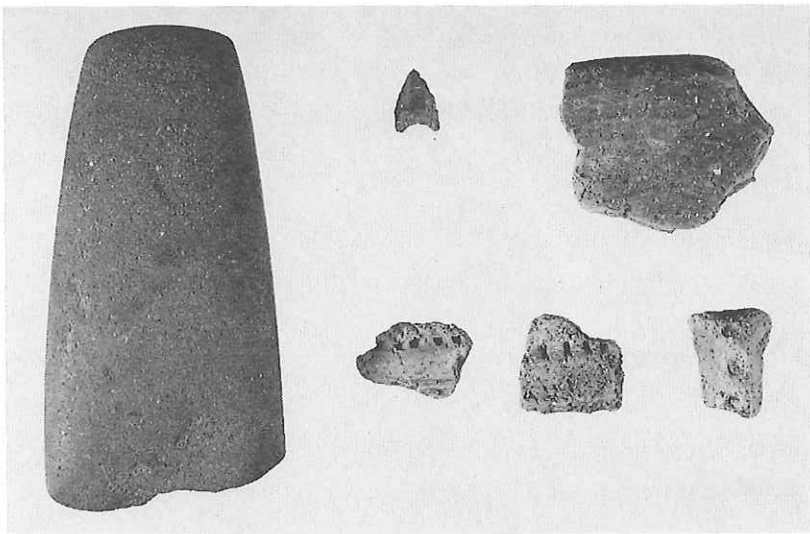


図34 福成寺南遺跡位置図

契機 付近の福成寺遺跡で、ほ場整備事業に伴う発掘調査を進めているとき、工事がほとんど終了していた遺跡の南に隣接する当該地で、縄文土器や石器およびそれ以降の遺物が採集された。昭和58年のことである。

図に示す遺物は、すべてその際に採集されたもので、資料的価値はやや劣るものの、奈佐谷地域の縄文遺跡の分布状況を考える上で貴重なため、ここに紹介する。

立地 盆地北部から南西に向かって大きく入り込んでいく奈佐谷のなかほどにあたる場所で、そこからさらに西に向いて小さい谷があるが、遺跡はその谷の谷頭部南に位置し、山裾の平地である。遺跡の広がり、東西 20



写15 福成寺南遺跡の遺物

m・南北 30 m 程度と推定される。

採集作業のみを実施。遺構は検出していない。

遺物 縄文土器は、磨消縄文系のものが数点と、石斧・石鏃が採集されている。石斧はほぼ完形で、全長 12.8 cm を測る。

まとめ わずかな土器片は、縄文時代後期の特色を示している。遺跡の位置からは、辻遺跡のムラが拡大して当遺跡や、ここから約 2.2 km あまりの下流域の宮井遺跡などに分散していった状況をうかがえるかのようなのである。

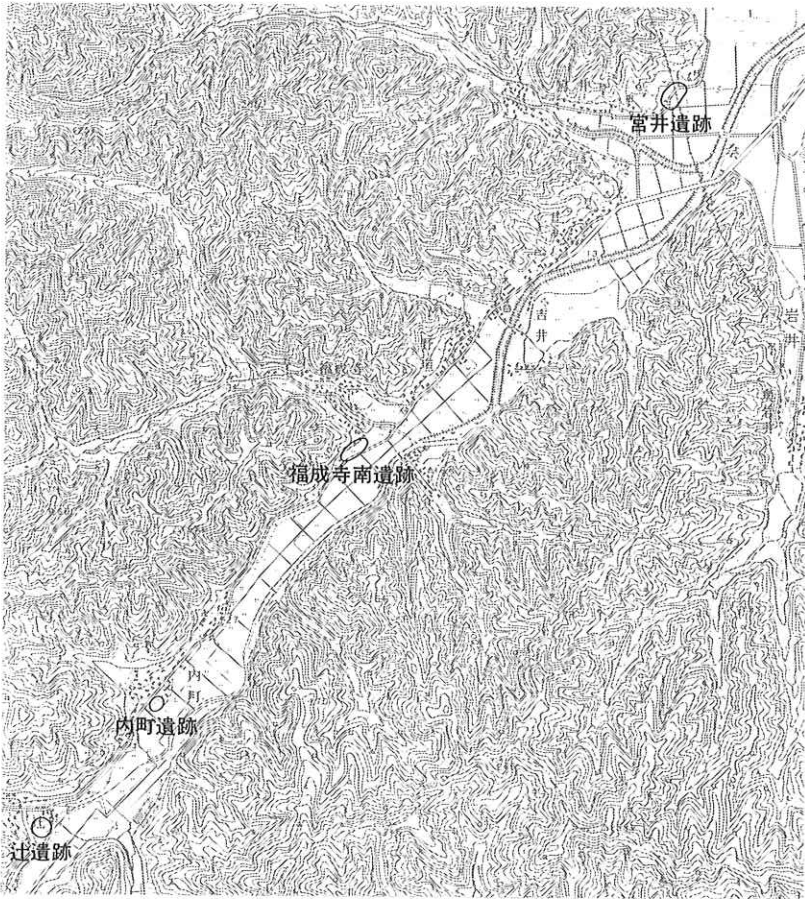


図35 奈佐地域の主要縄文遺跡の立地

2.11 香住荒原遺跡 香住字荒原

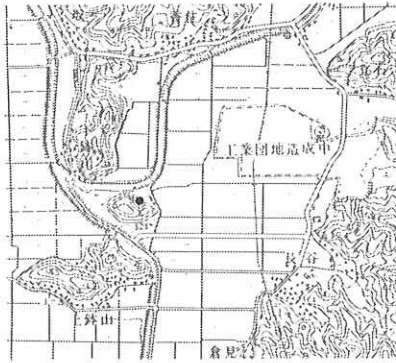


図36 香住荒原遺跡位置図

契機 かねてより貝塚かと想定されてきた遺跡である。水田のための用水ポンプとその小屋の設置に伴って、昭和33年に貝殻とともに若干の縄文土器が採集されている。

当時の事情を知る人の話からは、貝のなかには自然死の状態で出土しているものも多くあったということで、地下およそ2mの泥層に含まれていたという。

立地 遺跡は、現在ポンプ小屋の設置によって旧状を十分に知ることはできないが、独立丘陵状地形の小山の山裾に位置しており、地表面の標高は5mあまりであった。

複数の人が簡単な観察をしているが、当時の記録は確認していない。

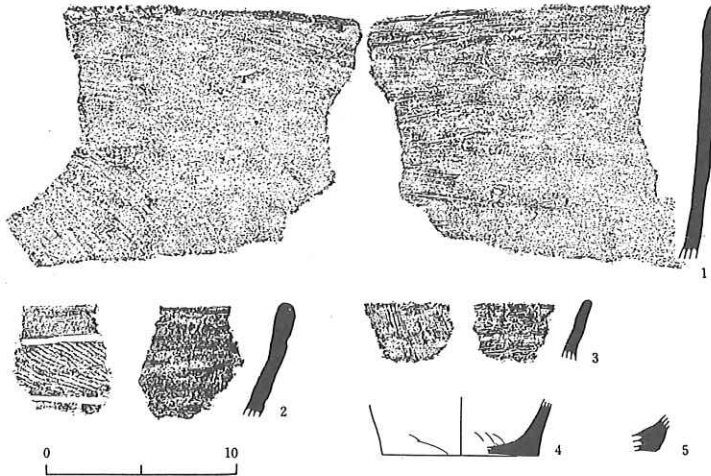


図37 香住荒原遺跡遺物実測図

遺構 確認できず。

遺物 土器片では、図のような磨消縄文系の土器や表裏とも条痕で仕上げるなどがある。図示していないものでは、このほかに竹を半分に分ったものを利用して文様を付した例もあった。

まとめ 貝塚の可能性は高いものの、現状では断言できる資料が乏しい。周辺地形の観察などからは、中谷貝塚周辺のような状況も想定できよう。今後、注意を要する遺跡である。

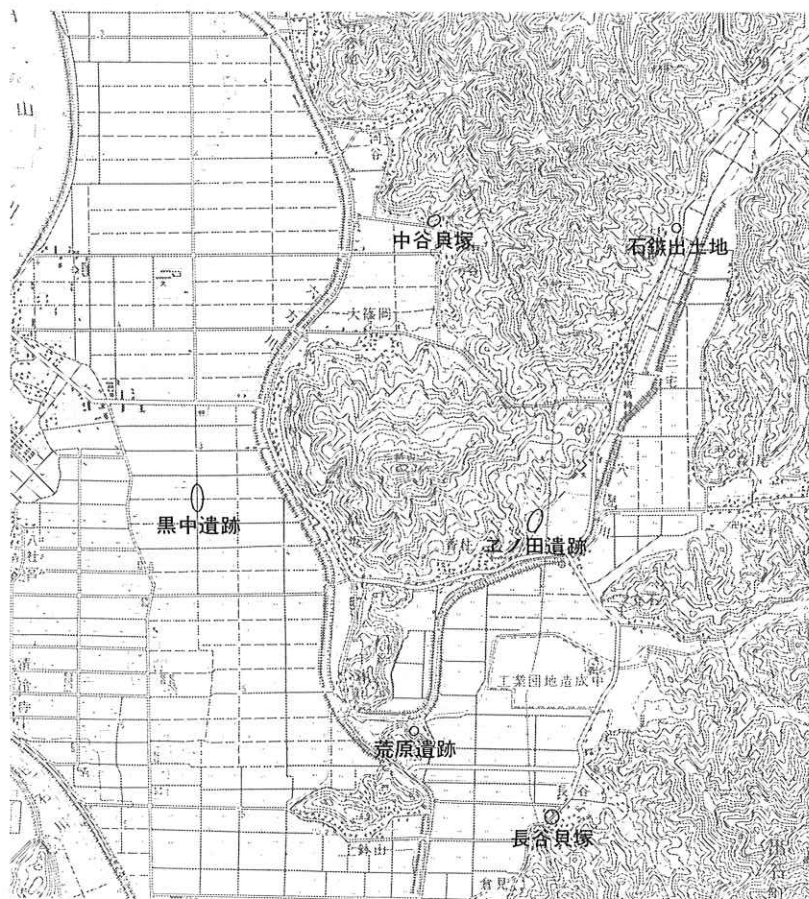


図38 付近の主要縄文遺跡の立地

2.12 その他の遺跡

以上のほかに、縄文時代の遺物を出した遺跡を簡単に説明しておく。

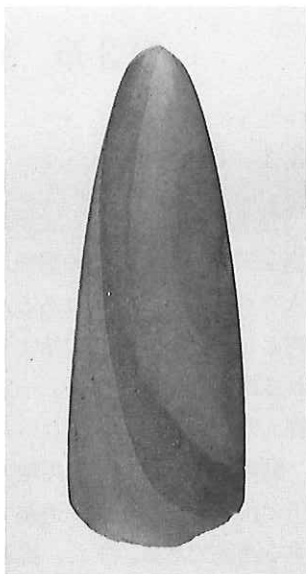
昭和58年に、辻遺跡の一角かとも考えられる地点で小学生によって石斧が採集されている。県道工事に伴う確認調査の範囲外から工事中に出土したもののようで、工事中の排土のなかから発見されている。遺物は磨製石斧で、全長17.8cmあまりを測り、ていねいな作りであった。

昭和62年、香住住宅団地の造成工事およびほ場整備事業に伴って、井走遺跡の確認調査が実施された。遺物検出面のより下層から縄文土器片の出土があった。広い範囲で調査を実施すれば、あるいは遺構の確認もあるかもしれない。山裾に広がる微高地状の地形に立地しており、縄文期の遺構は確認していないが、文様は不鮮明ながら早期後半と推定される楕円文が認められる破片や、後期のものが散見する。

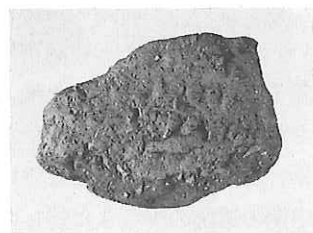
日高町水上遺跡で出土したのも、同様に楕円文を配する早期の土器片であったが、本例とともに早期の遺物が低地で出土しているケースとして注目される。

奈佐地域の^{たいらいじ}大平寺遺跡でも工事中に若干の縄文土器片が出土しており、但馬地方に多い高原性の縄文遺跡の例かもしれない。すくなくとも神鍋遺跡や辻遺跡との関連が注目されよう。

なお、これらのほかにも奈佐地域で内町遺跡、八条地域では女代神社遺跡、新田地域では木内黒中遺跡などでも縄文時代の遺物が出土している。



写16 辻遺跡周辺採集の石斧



写17 香住井走遺跡の押型文土器

第3章 弥生時代の遺跡と遺物

3.1 あらまし

弥生時代は、コメと金属器使用の新しい文化の時代として把握できる。縄文時代がわれわれの想像以上に高い生活文化をもっていたことは多くの人々が説くところではあるが、自然に積極的に働きかける本格的な栽培食物としてのコメ作りの始まり、鉄器・青銅器という金属器の使用に代表される裕福な階層の成長、一定規模の墓の構築など、いくつかの点で前代の縄文時代と根本的に異なった時代である。

駄坂川原遺跡は、但馬地方でも最も古い弥生遺跡のひとつである。六方川の川底で確認された遺跡であることから分かるように、低湿地に立地する遺跡である。また、実態は不明であるが前述した加陽地区の天神橋の約100mあまり上流で採集された土器片や九日市上町の女代神社南遺跡出土土器の一部には、前期の遺物が含まれるようである。

数少ない古い時期の遺跡は、こうした低湿地に散見するだけで多くはない。中期になっても豊岡市域の弥生遺跡は活発な動きを示していない。石斧や石剣などの石器出土地、気比銅鐸出土地などでいくつかの遺跡が確認される程度である。後期になると、例えば先に述べた宮井遺跡のような山裾の遺跡や小さな谷部に立地する遺跡が多く見られるようになる。前期・中期の遺跡の少なさに対して爆発的ともいうような遺跡の数の増加である。これは、遺跡発見の機会すなわち工事や発掘調査の量の差というのみでなく、遺跡の絶対数の差と考えるべきであろう。

ここでは、調査の進んでいる墳墓群の調査例を多く述べることになるが、順序として生活址などを先に、後半で墓の調査例について詳細に検討することにしたい。すでにふれておいたように、丘陵地の調査が先行している市域では、低地の遺跡発見は今後の大きな課題である。取りあげる遺跡の詳細な時期は議論のあるところであるが、ここではいわゆる「庄内期」の遺跡も含めて扱っている。